
告白GAME 《銀魂・沖神》

朝露詩奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告白GAME《銀魂・沖神》

【Nコード】

N3106Z

【作者名】

朝露詩奈

【あらすじ】

例の、「酔った振りして上司のヅラを取れ」から1年。犬猿の仲の二人が、またまた鉢合わせ。

かと思ったら！

「好きでイ

「……………／／／」

甘すぎる展開！なんてね、実は、沖田の告白は、ゲームだった！？嘘なんだか本気なんだか、とりあえず裏の裏の裏の裏の裏をかきまくり、ケンカップルが誕生！するかも。

第1幕 前夜（前書き）

受験勉強の合間にと、書いた拙作。

中間テストも終わりましたしね。

本来なら「蒼い空」をやるべきなんでしょうが、あればっかりは…
… 適当に焦って書いて、つぶしたくないんですよね…。ウン。

それでは、シリアス抜き恋愛話をどうぞ。

第1幕 前夜

一体、どういふ風の吹きまわしか分かりやしねエ。

だが、俺ら真撰組幹部と、万事屋の連中とが、一緒に花見をしに行くことになっちまった。

ま、どうせ近藤さんが、万事屋んとこの眼鏡の姉とちょっとでも近づきたいから計画したんだろうけど。

とりあえず、どういふ理由であれ、去年に引き続いて面倒なことた…。

俺はちらつと、枕元のカレンダーを見た。

4月10日 花火大会は、明日だ。

「…面倒くせエ」

つぶやくと、なぜかチャイナの顔が目に見えた。

…そーだ。アイツが一番面倒くせエんだ。俺の顔を見るたびに睨んできやがるし、つーかまず第一に、俺自身、アイツの顔なんざ見たかねエ。

だから、明日会ったらコテンパンにしてやるつ。

明日こそ、決着付けてやるんでイ。

こんなこと考えてる俺…大人げねエ気もしたが、そもそもかわいげのないアイツが悪いっつーことでいいや。

俺はそう決めつけて勝手に納得して、屯所の狭い自室で目を閉じた。

開けはなった窓から、夜風と一緒に桜の花びらが舞いこんでくるのを感じた。

気のせい、だろうか。

第1幕 前夜（後書き）

ありゃ？

以外と長くなりそうです、この話。

そっぴい、授業中に内職して書きためた短編があまりにたくさんあるんで、そのうち掲載しようかなあ。

ただ今、コピー本作りに一生懸命になっております…。

（何をやってるんだ この大事な時期に）

第2幕 当日

「それでは、たたいてかぶってジャンケンポン大会イ〜!!」

桜吹雪と青天のもと、ほろ酔い状態の姐さんが缶ビール片手に上機嫌で言った。

「ヤッホー!!」

湧き上がる拍手。

……そんな中、拍手していないのは2人。

あーあ、やっぱり来やがった。つか、このパターン去年と同じじゃね???

…とか思ってる俺と、

弁当を食つのに夢中なチャイナ。

っーか。

姐さんってまだ未成年だったよな、確か。ビールなんて飲んでいいのか？

そんなどうでもいいことをボンヤリと考えながら、俺は焼酎をちびちびりやる。

……そーいや、俺もまだ未成年だった。

まあいいや。

「んで？ルールはどうするんですかイ」

気乗りしないながらも、場の空気を読んで質問してみる。

「はアゝい、ルールはア……」

超ハイテンションで、姐さんは説明に入る。

するとそこへ、いきなり近藤さんが乱入。

「はいはい、皆さん……！」

って近藤さんかよ……！

盛り上がっていた場の空気が、瞬時に萎える。

しかしそんなことは気にも留めず、俺らの大将は「がっはっは……！」なんて笑っている。

「皆さんっ！ たたいてかぶってジャンケンポンは、去年すでにやっただではないですか！ どうですかここは、ニューフェイスのレクでも……」

「ってオイ、レクなんて言って、本当は乱　パーティするつもりじやねーだろっな」

旦那がいちご牛乳を飲みつつ冷やかに突っ込む。

「ちっ違いますよ！違うから！！」

……あわてる近藤さん。

「乱 パーティなんて考えちゃいけませんよお妙さん、俺はS プレ
イをしようと思ってます！」

「胸張って言うんじゃないエエエ！！！！」

旦那と姐さんが、同時に近藤さんの顔面に強烈キック。

「ぐはあー！」

苦悶の叫びをあげ、近藤さんは鼻血を流しながら地面に倒れた。
真選組局長ともあるう者が、情けねエ……。。

「大丈夫ですかイ？」

「ん……総悟……」

小さく唸りながら、近藤さんはよろよろと立ちあがる。

「す、すいません、ほんのジョークです」

それから気を取り直して（まだ鼻血は止まっていなかったが）、

「俺が紹介しようと思ったゲームは……クジで選ばれた2人が互いに
愛の告白をしあう……」

は？愛の告白？このメンバーで？

……何言ってるんでイ、近藤さん。

「その名も、告白ゲームです!」

第2幕 当日（後書き）

近藤さんが変態だ。

いつものことですけど。

蒼い空の時の近藤さんとは比べ物にならないほどかっこ悪いです
笑）

ていつか乱 プレイって………こっぴつ発言、夕方6時は困りますよ
ね。

第3幕 運命（前書き）

前書き？

特にないと思います。

第3幕 運命

告白ゲーム、ねィ……。

そんなこと言って、要は、アンタが隙あらば姐さんに告白してもらおうってたくらんでるだけだろィ？

駄目駄目、姐さんがそんなのいって言うわけ……

「まあ、面白そうじゃない近藤さん」

……って、え？
やんのかい！

「みんなも、それでいいでしょ？反対の人いる？」

「反対に決まってるア。」

「はい。俺は反対でさア、そんなの」

俺は言っっちゃった。

しかし。

「ブクク。反対だなんて言っっちゃって、サド、お前ホントは自信ないんじゃないの？」

背後から、アイツの声がした。

「は？何言っっちゃがんでイ」

「どうせ自分の告白に自信ないんだロ」

「るっせ、チャイナ」

「よっ、何にもできないムツツリ男！」

……何だと！？

「俺に不可能はねエ！！」

カチンときて、思わずそう返してしまった。

「へん。不可能がないなら、なんで反対アルか」

「……………」

……………俺がコイツに口論で負けたア…。
しかもそのニヤニヤ笑い。腹立つ。

「何でアルか？答えるヨロシ」

「ちょっと、やめなよ神楽ちゃん……………」

その時。

俺はナイスな理由を思いついた。

「だってオメー、考えてもみろイ。人数的にこれ、男同士が当たる確率の方が高けーだろうが。男が男に告白？あ、まさかチャイナ、BLの趣味あるとか」

「は！？そんなわけじゃ…！！」

ほら。言い返せない。

ざまあみる。

なんて思ったのだが、

「あら、そんなのいいじゃない。ゲームなんだから」

姐さんが口を挟んだせいで、撃沈。

俺は助けを求めてみんなを見た。が、

「いーじゃねエか、総一郎君よオ」

「やりやいいじゃねえか総悟」

「やってみましょうよ沖田さん」

「やってみたら面白いかもしれませんよ沖田隊長。……あんばんあんばんあんばん…」

……駄目だ、みんな酒に酔って、気が大きくなってらァ。おまけにザキに至っては、脳内が壊れかけ。

「分ーったよ。やりやいいんだろ、やりや」

ついつい、言ってしまった。

…まあ、いいよな。これだけの人数だ、必ずしもくじに当たるとは限らねエわけだし。

「やってやらア」

途端にみんなは沸き立つ。

「おー、総一郎君、よくぞ言ったア！」

「っしや、やるうぜ」

「サドチキンもついに覚悟したアルか」

「テメーはその命が奪われること覚悟しときなア」

「それではみなさん、1本ずつくじを引いてください」

近藤さんが、束にした何本かの糸を手握って差し出した。

わーっと、みんなでそれに群がる。

「僕は、じゃあこれを引きますね」

「私はこれアル！」

俺も、みんなと同じようにクジを一本引いた。
引いた…はずなんだが、

……あれ？

引けね。

ていうか、これ、誰かのクジと繋がってらァ。
まさか、当たった！？

俺は、糸の先を目でたどる。

糸を持ってんのは……

「チャイナっ!?!?」

第3幕 運命（後書き）

気づいたらお気に入り登録が2件。

これは、ヒット作を生み出せない私にとって、うれしすぎるニュースです。

ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3106z/>

告白GAME《銀魂・沖神》

2011年12月14日20時52分発行